分担研究報告書

油症検診受診者における落屑症候群

研究分担者　上松 聖典　長崎大学病院眼科　講師
研究協力者　北岡 隆　　長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 眼科・視覚科学分野　教授

研究要旨：落屑症候群は緑内障を伴いやすく、視野欠損をきたすことがある。今回油症認定患者の水晶体落屑物質の有無を判定し、血中の PCB 濃度との関連を調査した。

A．研究目的

落屑症候群は虹彩、瞳孔縁や水晶体前面など前眼部組織に灰白色の水晶体落屑物質が沈着する疾患で、緑内障を合併することが多い。落屑症候群の発症の原因についてはまだ詳細は解明されていないが、日光の曝露や加齢が関係しているとも言われている。今回の研究では油症検診受診者における落屑症候群の有病率を調査し、血中 PCB 濃度と落屑物質の関連を検討する。

B．研究方法

長崎県油症検診の 3 地区すなわち、玉之浦、奈留、長崎地区において 2019 年度油症検診の眼科部門を受診し、細隙灯による前眼部観察および眼圧の測定が可能であった油症認定患者を対象とし、水晶体落屑物質の有無を判定し、アイケア®を用いて眼圧を測定した。水晶体落屑物質の有無、眼圧、および血中 PCB 濃度を調査した。

（倫理面への配慮）

本研究のデータ解析においては、個人が特定できるようなデータは存在しない。

C．研究結果

対象者は 188 人（男性 97 人、女性 91 人）で、年齢は中央値 67 歳(30～91 歳)であった。水晶体落屑物質を認めたのは 8 人(4.3%)、11 眼で、そのうち両眼に認めたものは 3 人であった。水晶体落屑物質のある眼の眼圧は 11.4±2.7mmHg（平均±標準偏差）で、水晶体落屑物質のない症例の眼圧は 13.2±2.5mmHg であった。直近の血中 PCB 濃度を得ることができた 138 人において、血中 PCB 濃度の中央値は 0.9ppb(0.01-6.0 ppb)であった。このうち水晶体落屑物質を認めたのは 1 人 1 眼で、この症例の血中 PCB 濃度は 0.01ppb、眼圧は 13.3mmHg であった。

D．考察

水晶体落屑物質は線維柱帯の房水の通過を阻害し、眼圧の上昇を生じさせ、緑内障を引き起こす場合がある。緑内障は、厚生労働省研究班の調査によると、我が国における失明原因の第 1 位を占めている。落屑症候群の有病率には地域差があり、日本では特に九州地方で高い有病率となっている。落屑症候群の全国調査において、40 歳以上の落屑症候群の有病率は熊本県では 2.95%と報告されている[1)]。また福岡県の久山町スタディーでは 50 歳以上の 3.4%に落屑症候群が認

められた[2]。日本以外ではノルウェーで16.9%[3]，ギリシャで 11.9%[4]との報告もある。今回の調査では受診者の4.3%で落屑症候群が認められた。血中PCB濃度が得られた症例における落屑症候群症例の血中 PCB 濃度は低値であり、血中PCBが落屑症候群に関与する可能性は低いと思われる。

E. 結論

今回の長崎県油症検診受診者の落屑症候群の有病率は 4.3%であった。落屑症候群のある症例の血中 PCB 濃度は低値であった。

F. 研究発表　なし

G. 知的財産権の出願・登録状況　なし

参考文献

1) 布田ら. 眼紀.1992; 43: 549-553.
2) Miyazaki M, et al. J Glaucoma. 2005; 14: 482-484.
3) Ringvold A, et al. Acta Ophthal. 1988; 66: 652-658.
4) Topouzis F, et al. Am J Ophthalmol. 2007; 144: 511-519.